

1930-40年代の金永鍵とベトナム研究*

ユン・デヨン (尹大栄)**

Kim Yung-kun's Course of Life and Vietnamese Studies in the 1930s and the 1940s

YOUN Daeyeong**

Abstract

Who was Kim Yung-kun? What made him devote himself to so many things for which he worked in the 1930s and the 1940s? And how should we comprehend the significance of his efforts to blaze a trail in the field of Vietnamese research? These three inquiries are pursued serially in this study. Born in 1910 and graduating in 1927 from Gyeongseong Second Superior School, Kim Yung-kun came to Hanoi in 1931 as an assistant librarian, an experience that would give him a deeper understanding of Vietnamese history and culture with which he might be unfamiliar. Ten years later, he left Indochina and returned to Korea in order not to be involved in the Japanese military occupation of Vietnam.

Back in his country, Kim Yung-kun tried to apply himself to Korean studies, strongly influenced by Mun Il-pyeong and some other Koreanologists. However, after joining in with other leftists, his desire arose for a more active social and political *engagement* in order to deal with acute national problems. Since that time Kim Yung-kun endeavored to integrate academic work with concrete social and political *engagement*, leading to a number of action research studies covering Korean history, tendency literature, criticism of arts and so forth. These academic interests and militant *engagement* have originated from Kim Yung-kun's experiences in Vietnam. Having devoted a part of his life to Hanoi earned Kim Yung-kun the reputation of being an expert on Vietnamese studies and won him the enduring friendship of Lê Du. In the early 1940s, the Korean Vietnamologist also published in a book his earlier works on Japanese relations with Vietnam, Champa and Cambodia, which he had been continuously writing since about 1936. Years later, he met with numerous difficulties when carrying out a study of Vietnam as he was deeply involved in various political movements. And so, his vision of Southeast Asia turned out to be incomplete.

Keywords: Kim Yung-kun, Kim Vĩnh Kiện, Kim Eiken, Lê Du, Vietnam, Vietnamese studies

キーワード: 金永鍵, レ・ズ, ベトナム, ベトナム学

* 本稿は、『東南アジア研究 (동남아시아연구)』(*The Southeast Asian Review*, 韓国東南アジア学会) 19巻3号(2009年10月)に発表した論考を再検討のうえ補完したものである。

** 仁荷大学韓国学研究所; Center for Korean Studies, Inha University, 253 Yonghyun-dong, Nam-gu, Incheon, 402-751, Republic of Korea

e-mail: vinhsinh98@hotmail.com

和訳: イ・ミジ (李美智)

はじめに

インドシナ植民地化が本格的に進行した19世紀後半に韓国[#]に伝わり始めたベトナムに関する情報は、20世紀の初期になっても持続的に入ってきた。特に、1905年に著された『越南亡国史』（巢南子（述）、梁啓超（撰）上海：廣智書局）が韓国社会と海外僑民社会に流布するようになって以後、かれらのベトナムに対する関心は次第に高まりをみせ、こうした流れは韓国における各種学会誌と言論を通じたベトナムに関する情報の流通拡大へとつながった。1910年の韓国併合以降、言論活動は萎縮したが、それにもかかわらず、ベトナムに関する情報を伝えようとする努力は、1920年代から『東亜日報』や『朝鮮日報』などのメディアによって徐々になされていった。

特に、1930年代からは、ベトナムの独立運動を素材にした書籍が出現するようになった。李如星の『世界弱小民族運動概観』（ソウル：世光社、1930）、および洪穆の『印度支那動乱四十年史』（東京：軍事教育社、1943）はベトナムの民族運動の展開過程から教訓を得て、母国の独立運動に適用しようとする意図で著したものである。独立運動を素材にするベトナムのいわば「越流」は、このように国内と国外を問わずその影響力を発揮しはじめたのである。

同じ時期に登場した、金永鍵の『印度支那と日本との関係』[1943a]という本を、筆者が初めて目にしたのは1990年代の後半のことだったと記憶している。日本とベトナムとの関係のみならず、ベトナムと朝鮮との種々の交流の事例も扱ったこの研究は、一種の大きな衝撃であった。当時、韓国人たちのベトナム研究動向に対して門外漢だった筆者は、このような真摯な学問的成果が、植民地期の韓国人研究者の手によりいかにして可能となったのか、という疑問を抱き始めた。

幸い、約10年を経た現時点において、その糸口を少しずつ解く手がかりを、新しく発掘した少なからぬ資料の中に見出すことができるようになった。本稿では、1930年代以降展開していった金永鍵のベトナム研究を改めて検討し、『印度支那と日本との関係』の執筆を可能ならしめた金永鍵の学問的経歴を明らかにするとともに、その後の彼の知的活動の特徴と変容を、1940年以来の金永鍵の「転変無常」な一生 [金 K 1947: 3]^{##}とも関連させながら究明してみたい。

[#] 以下、本論文では、日本で刊行される学術論文では通常「朝鮮」ないし「朝鮮半島」および「朝鮮人」と表記されるところに、「韓国」「韓国人」という名称・表現が使われている。韓国では植民地期に関しても「韓国（人）」と表記するのが一般的であり、日本の読者に対して、一韓国人ベトナム研究者の視点を示し、かつ日本における「朝鮮」という名称が持つアンビヴァレンスを避けたいという筆者の意思を尊重し、原文表記のままとした。（編者注）

^{##} 本論文では、金永鍵の著作は、言語ごとに日本語にはJ、韓国語にはK、中国語にはCを付して区別される。（編者注）

I 初期の経歴と BEFEO

1930-40年代に旺盛な活動を展開した金永鍵は、一体どのような過程を経て、その基盤を築いたのか。まず、その出生地に関連して、『震檀学報』第10巻〔震檀学会 1939〕は、「本號執筆紹介」において金永鍵の原籍を京城（現在のソウル）だと紹介している。その後の履歴に関連して、筆者にとって決定的な手がかりとなったのは、偶然に発見した『2007 景福同窓名簿』である。この資料によれば、金永鍵の名前は1927年3月に京城第二公立高等普通学校の第2回卒業生名簿に記載されていた〔景福同窓会 2007: 52〕。

このような事実を基に、景福高等学校の協力で手に入れた金永鍵の学籍簿によって、彼と関わった家族の事項や個人情報をもより具体的に把握できるようになった。この資料によると、1910年3月18日に生まれた金永鍵の本籍は、京城通人町（現在の鍾路区通人洞）である。黄海道延安、海州、甕津、延白地域の郡守と、黄海道地方土地調査委員会の臨時委員を歴任した金定鉉（1868-?）の二男であった彼は、父親が朝鮮総督府の中樞院調査科の嘱託として転勤することになり、海州高等普通学校で一年生を終え、1923年に、京城第二公立高等普通学校へと転校し、母、兄、兄嫁、甥などとともに京城に居住することになった〔朝鮮總督府 1910-1914, 1916-1921, 1924; 内閣印刷局 1913-1917; 京城第二公立高等普通学校 n.d.: 98; 親日人名辞典編纂委員会・民族問題研究所 2008: 29〕。

京城第二公立高等普通学校を卒業後の経歴については、不明確な点が多い。全京秀は、金永鍵が1920年代にフランスに留学した後、ベトナムのハノイ（Hà Nội）にある *École Française d'Extrême-Orient*（遠東博古学院, *Viễn Đông Bắc Cổ Học Viện*, 以下フランス極東学院と略す）への勤務を発令されたと推測しているが〔全 1999: 97-98〕、現在まで金永鍵が残した著作や傍証資料の中で、彼がフランスに滞在したことを、直接確認できる証拠は見つかっていない。

ただし、金永鍵の具体的な学術活動時期及びその様相と関連して、信憑性のある資料は存在しており、それは1927年2月にさかのぼることができる。金永鍵はその年の2月から1931年1月までの4年間に、『朝鮮文壇』『大潮』『解放』『朝鮮日報』などに習作詩を発表した〔金 K 1948: 102-111〕。¹⁾ その他にも、『プロレタリア文学』1928年12月号と、『無産者』1929年X号に、小説「苦力」と「同盟罷業」をそれぞれ掲載した〔同上書: 112〕。このことから金永鍵は、青年時代に左翼思想に傾倒していたと推測できる。

以後、金永鍵が1930年代にベトナム・ハノイにある、フランス極東学院の図書館の司書として勤めたことは、先行研究により明らかにされている〔松本 1936: 66-67; 任 2004: 285-286; 全 1999: 98; 劉 2007: 69〕。それでは、果して金永鍵は正確にいつベトナム・ハノイに行ったの

1) たとえば、「고요한 저녁 거리 위를 [静かな夕方の道の上を]」「가을이라고요 [秋ですよ]」「病室의 벽 [病室の壁]」「hammer [年長いた水夫へ]」「群衆」などがある。



写真1 インドシナ赴任当時の金永鍵

出典：『朝鮮日報』1931年4月13日付2面

だろうか。この問題を明らかにするため、筆者は、当時の、韓国の新聞および日本の東南アジア研究者たちの証言、そしてフランス極東学院が発刊していた学術誌 *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* (以下 *BEFEO* と略記) を検討してみた。

1931年4月13日、『朝鮮日報』の2面に掲載された記事によると、京城第二公立高等普通学校を卒業した金永鍵は、上海や南京などで、数年間にわたりフランス文学を専攻し、京城フランス総領事館に勤務した。その後、本領事館の周旋により、フランス極東学院に司書として赴任することになり、14日に出発し神戸経由でインドシナに到着する予定であった。これに関し、満洲事変の直後、ヨーロッパから帰国の途にあった杉本直治郎（広島文理科大学東洋史研究室所属）が、インドシナにしばらく滞在しているときに金永鍵と知り合ったという事実と、1931年の研究成果を集大成した *BEFEO* の tome 31 に、『平家物語』のフランス翻訳本²⁾ に対する書評を金永鍵がチャン・ヴァン・ザップ (Trần Văn Giáp) と共著で掲載していることから、1931年からフランス極東学院で活動を始めたことが確認できる [杉本・金 1942: 4; *BEFEO* 1931: 526-528]。実際、金永鍵自ら、1931年セデス (George Coedès) 博士と知り合い、それをきっかけにしてフランス極東学院に来て働くようになったと明らかにしている [金 C 1939: 164]。そして1932年に刊行されたフランス極東学院の彙報を見ると、金永鍵は、ベトナム人の同僚、グエン・ヴァン・ト (Nguyễn Văn Tô)、グエン・ヴァン・コアン (Nguyễn Văn Khoan)、チャン・ヴァン・ザップ (Trần Văn Giáp) などとともに、一種の助手 (assistant) 的はたらきをしていた。結局、彼は1932年5月1日フランス極東学院に正式に雇用され、現地職員だったレ・

2) *Épisodes du Heiké Monogatari*, traduits par S. Goto et M. Prunier, Paris, 1930, 148p.

ズ (Lé Du) に代って日本書の図書室の補助司書 (bibliothécaire-adjoint) の資格で、日本と韓国資料の管理を担当するようになり、1936年4月には日本図書室主任になった [金J 1932: 125; BEFEO 1933: 416-417; 金J 1943a: 1-2]。

補助司書と日本部主任としてフランス極東学院の日本と韓国資料を管理した金永鍵は、多様な書籍を極東学院に提供した。1931年から1939年まで、金永鍵が寄贈した図書は合わせて72種で、種類別に見ると単行本52種、学術誌11種、論文9種である。内容分類をその多い順に並べてみると、歴史類、語学類、文学類、辞典類、書目類、哲学類、考古類、族譜類などであった [BEFEO 1931; 1933-1937; 1939: 図書目録]。1937年、朝鮮総督府と朝鮮中央仏教専門学校が、それぞれ「朝鮮」の書法に関する図書と仏教系統書籍をフランス極東学院に寄贈したとと比較すると [BEFEO 1937: 560, 568-569, 584]、金永鍵は歴史、語学、文学などにより強い関心を抱いていたようである。また歴史に対する関心は、朝鮮史、ベトナムと日本との関係史、香料をめぐるアジアと西欧の関係史などに集中していた。また当時、朝鮮語学会で出版された書籍や、『한글』[ハングル]、『正音』などのような学術誌を寄贈したことから、ベトナム現地社会にハングルを知らせるために努力したと推測することができる。特に『한글』は、国語学者で同時に独立運動家だった李允宰(1888-1943)が定期的に金永鍵に送ったものをすべて読んだ後、フランス極東学院に寄贈したと考えられる [金K 1937: 464]。

金永鍵の活動は図書寄贈だけに止まらなかった。正確な時期はわからないが、彼はペリオ (Paul Pelliot) が1904年に *BEFEO* 誌上に発表した“Deux itinéraires de Chine en Inde à la fin du VIII^e siècle”に登場する多様な地名に関する索引作成作業を担当した [Gutman 1976]。また、1933年9月には、過去に日本人居留地 (日本町) があった中部海岸のホイアン (Hội An) を直接訪問して、日本の歴史遺跡を探求するなどの現地調査をおこなった。同様に、1937年9月には、当時フランス極東学院の総秘書兼司書 (secrétaire bibliothécaire général) だったミュス (Paul Mus) の要請によって、16-17世紀のインドシナ地域と日本との関係の研究途上で死去したペリ (Noël Peri) の研究を再開するために、古くからの港であるダナン (Đà Nẵng) と、ホイアンに出張し、調査をおこなっている [BEFEO 1933: 1049; 金J 1943a: 1]。他にも、1936年にフランス極東学院と普成専門学校との文化交流においても、金永鍵が役割を果たしていたと推測できる。当時普成専門学校は、ハノイのフランス極東学院と考古遺物、民俗遺物、美術品などを交換し、新羅の磚瓦と高麗の磁器などを送ったことが確認できるが、同1936年に韓国を訪問した金永鍵が両機関の間をつなぐ役割を果たしていた可能性も排除できない [金K 1947: 82]。³⁾

個人的な研究経歴としては、まず金永鍵が徐々にベトナム語に親しんでいく過程を、ハング

3) 劉仁善は、金永鍵が李龍祥の研究のため、1936年の夏、黄海道を訪問したことを指摘している [劉 2007: 69]。

ルのローマ字表記から間接的に確認することができる。韓国資料を整理していた金永鍵にとっては、ハングルのローマ字表記は簡単な問題ではなかつたろう。1932年当時は「全書(전서)」を「zen-se」と、「経典(경전)」を「kyeng-zen」と表記したことから分かるように、「ㄷ」を「e」に、「ㄹ」は「ye」に表記していた [BEFEO 1933: 447, 457, 458; 1939: 286, 288, 305, 311]。ところが、遅くとも1936年以降は、「朝鮮(조선)」を「Zoson」に、「語法(어법)」を「obob」に、「崔鉉培(최현배)」は「Ch'oi Hyombai」という形で表記し始め、「ㄷ」は「σ」に、「ㄹ」は「yσ」に対応させて表現していた [BEFEO 1936: 543]。既存のハングルのローマ字表記にないベトナム語の独特の母音「σ」がハングルの「ㄷ」と非常に似ていたことに着目したのである。こうした事例は「ㅡ」を「u」に「ㅣ」を「uri」に表現したことからも確認できるが [BEFEO 1939: 286, 288, 305]、ベトナム語の発音に徐々に慣れていった金永鍵が、フランス極東学院のフランス人学者やベトナム関係者に、正確なハングルの発音を伝えようと考案したものと理解することができる。

ハングルのローマ字表記にベトナム語のローマ字表記を活用したこと以外にも、金永鍵の学問的な活動は多様な領域で展開しだした。すでに述べたように、金永鍵は、1931年に、『平家物語』のフランス語訳に対する書評と解説を同僚のチャン・ヴァン・ザップ(Trần Văn Giáp)とともに執筆し、文学の研究も始めた [BEFEO 1932: 526-528]。また、同年にセデスやチャン・ヴァン・ザップとともに、仏教関連の研究成果を紹介し、共著者がパリで刊行した *Bibliographie bouddhique* [Przyluski et al. 1931] から抜け落ちていた『仏教研究』『密教研究』などの雑誌、および辻森要修の『学界綜覧』を1931年に補い、1929-30年に刊行された日本の著書と博士論文の目録の中で仏教に関する研究成果を多数指摘している [BEFEO 1932: 546-550]。同時に、1932年と1934年には、伊達光美の『日本寺院法論』(東京: 巖松堂書店, 1930)と、郡司喜一の『十七世紀に於ける日暹関係』(東京: 外務省, 1934)に関する書評を、それぞれ発表した [BEFEO 1933: 1033-1034; 1934: 704-707]。さらに1938年には、日本語の公式のローマ字表記(1937年制定の訓令式ローマ字)を整理、紹介して、フランス極東学院がこの方式を採用するのに寄与した [Kim 1938: 306-308]。

このように、金永鍵はフランス極東学院において日本の文学、宗教学、史学、言語学などの分野で研究を開拓していったが、その関心は日本にとどまらず、1937年4月には、「安南ハノイ通信」という一文を、今度は『한글』[ハングル](朝鮮語学会機関誌)に発表して韓国学分野への持論を述べることとなった [金 K 1937: 464-465]。⁴⁾すでに1936年からハングルのローマ字表記に関心を持っていた金永鍵は、外国語のハングル表記に対して李允宰に意見を述べ、ベトナム語の「â」を「・」に表記することを提案したりしたのである。

4) この文は1936年12月29日に完成されたもの、となっている。

以上みてきたように、金永鍵は、ハノイのフランス極東学院に勤めつつ、徐々に研究を重ねていった。1937年にフランス極東学院に考古学学科が創立されたとき、記念撮影した2枚の写真に、金永鍵と思われる丸眼鏡をかけた人物が、ブザシエ (Louis Bezacier)、副院長ゴルビュー (Victor Goloubew)、院長セデス、コラニ (Madeleine Colani)、デュボン (Pierre Dupont)、マニクス (Jean Manikus)、レビー (Paul Lévy) などと並んで写っているのは [Clémentin-Ojha and Manguin 2007: 180–181]、司書として、また研究者として彼の専門的な能力が認められたからではないだろうか。

II 1940年以降の韓国と日本での活動

フランス極東学院に勤めたことがあるグエン・ティエウ・ロウ (Nguyễn Thiệu Lâu) が提供した資料によると、1939年12月23日、当時極東学院に勤めていたアジア人職員たちがクリスマス・パーティーで記念撮影をした写真があり、金永鍵も最前列の左側から二番目に他の同僚と一緒に着席していたことが確認できる [Nguyễn Thiệu Lâu 1997: 29]。全京秀は「金永鍵が1940年初期まではハノイに居住していたことは明らかで……、1940年末から1941年初めにかけての時期にベトナムのハノイから日本の東京に居所を移したようだ」と主張しているが、金永鍵本人によれば、「1940年に朝鮮に帰って来た」と話している [金 K 1947: 3]。

ベトナムを去ることになったのは、1940年10月に、日本軍が大東亜共栄圏の建設という名目で北部のハイフォン (Hải Phòng) 港を占領し、フランスと日本の関係が悪化した状況と関連している。当時日本国籍の金永鍵は、ベトナムから帰国するしかない状況だったという [金 J 1943a: 2]。ハノイを後にした翌年にもセデス院長は副院長ゴルビューを通じて、フランス極東学院に帰って来るように懇請したが、金永鍵は、日本軍が駐屯している以上、その要請に応じることにはできないと婉曲に断った [Coedès 1947: 150]。

以後、金永鍵の足跡は、日本でみつけられる。金永鍵は、1941年5月28日、東京の学士会館で、日本民族学会の主催の会員懇談会において「印度支那人類研究所の事業とその意義」と題された講演を行った。また5月に続いて6月の日本民族学会の会員懇談会にも参加していたことを確認することができる [金 J 1941a: 425–433; 任 2004: 285; 日本民族学会 1943: 437–439]。1941年10月当時、東京市淀橋区戸塚1-49日乃出館2号に居住していた金永鍵は、この時から日本民族学会の会員として活動しはじめた。⁵⁾『民族学研究』新第1巻第9号(1943年9月5日)の会費領収者の名簿に金永鍵の名前が見えるが、しかしその後日本で活動した記録は

5) 『民族学研究』第7巻第4号(1942年6月10日)によると、会員転居欄に、東京市芝区白金臺町1-56の藤山工業図書館に転居したとなっているが、1943年1月の住所は、東京市本郷区丸山福山町3八清荘28号となっている。

見つからない。

一方、韓国を舞台にして活動した痕跡は1941年9月から確認することができる。⁶⁾ 金永鍵は1946年9月当時、

はじめから私は朝鮮史を専攻したのではない。しかし、早くから外国の文献を渉獵している間に、朝鮮に関する史料の中で、私が朝鮮に紹介したいと思うものをあちこちで見つけ出すことができた。それらをそのままにしておくのはもったいなかったので、私はひまがあると少しずつノートを記しておいた。1940年に朝鮮に帰って来てからは、……時局は緊迫を告げており、私もいつまでもそのノートを持ち歩くこともできず、忽ちそれらを整理した後、一つ二つずつ『春秋』や『朝光』などの雑誌に発表しはじめた。

と回顧している [金 K 1947: 3]。ここで「早くから」と述べているのは、ハノイに滞在してフランス極東学院に勤め始めた時点をさしている。『春秋』第2巻第8号(1941年9月)と第3巻第8号(1942年8月)に、それぞれ「西伯利亞와 朝鮮의 移民」[シベリアと朝鮮の移民]と「海外에 紹介된『春香傳』」[海外に紹介された『春香伝』]を発表し、また『朝光』第8巻第10号(1942年10月)と第10巻第1号(1944年1月)には、「海外에 紹介된『直星行年便覽』」[海外に紹介された『直星行年便覧』]と「朝鮮外交史의 一端」[朝鮮外交史の一端]が、次々と掲載されていった。特に、「西伯利亞와 [と] 朝鮮의 [の] 移民」では、ロシアの「プシロ」が残した文献を基にして、1863年から始まった韓人の移住民の歴史を扱っており、「朝鮮外交史의 [の] 一端」では1886年6月と1887年5月の間に展開された朝鮮とフランスの外交交渉の状況を論じている。

こうした朝鮮の対外関係史に対する金永鍵の関心は、民族主義史学者の文一平(1888-1936)、及び1934年5月に創立された震檀学会との交流が影響を及ぼしたようである。文一平は常に金永鍵の学術活動を激励していたが、金永鍵は文一平について「近代朝鮮の対外関係に関して重要な一ページを開いた」と高く評価し、以後ロシアとフランスとの関係史に関する論文を発表したことを考えると、文一平の学問的な成果が金永鍵にも多大な刺激を与えたと推測することができる。また「震檀学会の先輩たち」から得た継続的な激励も、金永鍵にとって、本人の「菲才をかえりみず、今後はもっと科学的にこの方面[近代朝鮮の対外関係]に関する調査と研究を続けてみる」決定的なきっかけになったという [金 K 1947: 3-4]。日本の植民地支配からの解放の翌日、1945年8月16日に、ソウル仁寺洞の太華亭で開催された震檀学会の臨時総会に参加した金永鍵は、常任委員として幹事に選出され [李仁榮 1947: 153]、10月29日から

6) 『新文學』1巻2号 [서울타임스 [ソウルタイムス] 社出版局) 1946年6月] の「文学家住所録」によると、金永鍵は「5月1日現在、ソウル紅把町120」に居住している。

国定教科書編纂研究委員会の代表として、震檀学会委員長の宋錫夏、李定根、李源朝などとともに活動し始めたのである [『자유신문』 [自由新聞] 1945年11月9日]。

しかし解放以後の激動的な政局は、金永鍵が朝鮮の対外関係史をじっくり研究したり、教育方面での学術活動を続けられるに十分な条件を奪ってしまったようである。解放直前から1949年に至るまで、金永鍵が発表した論文を時期別に整理して見ると、著述活動は、朝鮮の対外関係史のほかに、文学方面における著作活動が顕著であった。⁷⁾ それでは、金永鍵が歴史的な作業以外に、文学的な作業にも関心を傾けた理由はどこにあったのだろうか。1947年8月、ソウルの白楊堂から刊行された金永鍵の『語録』は、その手がかりになる。金永鍵は「序」において、

この『語録』の副題は、一九四二—一九四四年の遺書である。ブルジョア社会の腐敗した偽善的な道徳律に対して、私は無限な憤怒を感じたのである。私はこの古い原稿を発表することで、私の過去を清算したい。

と心情を明らかにしている [金K 1948: 3]。1942-44年の時期の断想を、2, 3行あるいは1ページほどの短い文章で綴っていった『語録』という著作は、当時のブルジョア社会を批判すると同時に、自分の過去を清算するための新しい倫理と道徳律を求めている。金永鍵は「君のものは私のものであり、私のものも私のものだ。これが今日の不合理な社会の腐敗した道徳だ」とブルジョア社会の病弊を指摘し、利己主義的な考え方をきれいに洗いながすことを訴えた [同上書: 12, 30]。

「私一人が苦しんで解決され、後の若者達がそれを避けることができれば、私はどんな苦しみでも進んで受けてみる」 [同上書: 46] という利他的な姿勢は、彼の学問観にも影響を及ぼすようになるが、

私は一日に何回も良心に問うてみる言葉がある。「なんのために学問をするのか」と。「人類の幸福のために」答えは簡単で明瞭だが、普通人々は自分のために学問をするようで、学問のために学問をするようにも思われるからである。

と『語録』では学問に対する複雑な心情を紹介している。

人類の幸福のための学問は、まず方法論的な側面において、自らの意思を示すために手段と方法とを分けなくなった [同上書: 21]。そして、

7) 『作品과 人生』 [作品と人生] は、乙酉文化社から発刊される予定だったが、現時点において実際に出版されたかどうか未確認である [李仁榮 1949]。

生命というのは何なのか。動くものだ。生命が動いて死に発展する。だから死は生命の延長だ。

などという「観念的で言葉だけの哲学」を否定した [同上書：34-35]。同時に、自分の意思を効率的に表現できる道具として文学を選択するようになっていった [同上書：21]。

こうした道具としての文学は、人の心が体より貴重だと言いながら、実際には体のために心を犠牲にする『若きウェルテルの悩み』のような人為的な悲劇を否定しており、自分の詩興に一人酔いしている「フランス象徴派」の詩人になるよりは、詩を書かずむしろ阿片でも吸って横になっていた方が良く、とのべている [同上書：57-58]。金永鍵は、解放直前の1945年7月に、自分を含めて「朝鮮の文学者たちが活潑な闘争を継続できなかった過ちを率直に自己批判すると同時に、地下あるいは地上で力戦と血闘の経歴を持っている偉大な指導者たちが指示してくれるコースに依って、二度とそのような過ちを犯さないように気をつけ、そして忠実に歩いて行かなければならない」と主張したのである [金 K 1945a: 37]。

このように、元々慣れ親しんできた歴史学の方法論のうえに、道具としての文学を採用するようになった金永鍵は、「一時、私にも、時間的に物質的に、もう少し余裕があったらと、はかない夢を見たこともあったが、そうした夢は私の一生には現実的にあり得ることではなさそうで、私は日常の闘争を継続しながら、学問をしていくのが一番賢明であると悟った」と述べている [金 K 1947: 4]。

結局、こうした判断に基づいて、解放後の金永鍵の主な活動は、震檀学会の内での学問的な活動以外に、当時の左翼系文学者たちとの提携による積極的な現実参加という形をとった。金永鍵は、1945年9月17日に発足した「朝鮮プロレタリア文学同盟」で、金台俊、林和などとともに組織委員に選出された [김혜니 2002: 23]。また、1945年10月22日に結成された「新芸術家協会」にも参加して、評論家としても活動を始めた [『대중일보』 [大衆日報] 1945年10月22日]。一方、「朝鮮文化建設中央協議会」と「朝鮮プロレタリア芸術同盟」が次第に対立していく過程において、二つの団体の統合へむけた努力が、12月13日の「朝鮮文学者同盟」結成として現われた時にも、金永鍵は、朝鮮文学者同盟中央執行委員会の書記長の職を引き受け、また全国文学者大会の準備委員としても選出されている [『자유신문』 [自由新聞] 1945年12月25日]。

翌1946年の春から秋にかけての金永鍵の言論活動も注目に値する。彼は、朝鮮文学者同盟副議長の李泰俊が1946年3月25日に創刊した『現代日報』の活動にも参加して、外信の責任者となった [李泰俊 2005: 27]。『語録』には当時、記者たちの無知を嘆き、厳しい批評を載せているが [金 K 1948: 14, 27, 62]、金永鍵自身、自らジャーナリストとして言論界に身を投じたことをみると、「自分の意思を示すために手段と方法を分けなくなった」という文学的な活

動が、ジャーナリズム活動にもそのまま適用されたと理解できる。

以後、1947年、金永鍵の活動は、全国文化団体総連盟（以下、文連）を中心に続けられた。これは、左翼陣営が、文学家同盟を中心にして、各種文化芸術団体を連合して結成した文学者の連盟で、金永鍵は、同年2月にその代表に選出された [金允植 1985: 467]。また、3月17日には民主主義民族戦線が「世界労聯極東調査団」一行の韓国訪問を歓迎するために、民主主義政党団体聯合の世界労聯極東調査団の歓迎準備委員会を組織したが、金永鍵も接待部の委員としてこれに参加している [『서울신문』 [ソウル新聞] 1947年3月19日]。

しかし1948年になると、金永鍵の活動は深刻な危機に直面した。当時の南朝鮮労働党（南労党）幹部を含めて、文連の指導者だった林和も越北 [38度線を越えて北側に行くこと] した後だったので、代理人だった金永鍵は委員長として文連の命脈をなんとか維持することしかできなかつた。1948年2月13日、組織の弱体化を隠すことができなかつた金永鍵は、この事実と逃れられない状況とを北に報告した [金允植 1985: 467-468]。以後、金永鍵と関連した韓国での行跡は途絶え、その後についてはいまだに明らかになっていない。ただ、時期は不明だが、越北したということだけが伝えられている [權 1990: 241]。

1940年にベトナムから一旦韓国に戻り、しばらく日本で活動していたが、1945年の解放を前後して、国内で学問活動と本格的な現実参加を並行しておこなおうとした金永鍵は、1948年2月頃になって文壇と言論を通じた自分の意思表示と行動に制限が加えられるようになると、先学たちの督励も得て、元々計画していた学問研究の方に少しずつ回帰して行く様子を見せた。すでに1947年9月に「巴里 시대의 홍종우: 불국문헌에서」 [巴里時代の洪鐘宇: 仏国の文献から] を発表した金永鍵は、1948年3月には「壬辰倭乱과 遣日使節」 [壬辰倭乱と遣日使節] という論考を発表して対外関係史の研究を再開した。1948年6月と7月には、『文化와 評論』 [文化と評論] と『黎明期の 朝鮮』 [黎明期の朝鮮] という著作をそれぞれ発刊してその間の学問的成果を整理し、1949年1月に発表された「한글에 관한 斷想」 [ハングルに関する断想] を最後に韓国での公式の活動は幕を閉じたのである。

では、果して1930-40年代のハノイ滞在と帰国後の故国での活動は、金永鍵のベトナム研究にどういう形で反映されたのか、その成果と意味を追跡して見たい。

III ベトナム研究

趙興国は、金永鍵の東南アジア研究を紹介し、日本の大東亜共栄圏の樹立とかかわり合う御用的性格を強調している [趙 2001: 49]。しかし金永鍵のハノイでの足跡とベトナム研究の成果を検討して見ると、趙興国の評価は行き過ぎという感がなくはない。

まず、金永鍵個人は、公式的には日本国籍であったにもかかわらず、自分の文を日本の学術

誌に発表する時を除き、「Kin Ei-Ken」という名前ではなく「Kim Yung-kun」という韓国式名前を常に使っていた。⁸⁾ また、日本や韓国関連の図書の書誌目録を作成する時も、1910年に日本が韓国を併合したあと、「漢城」の代わりに使い始めた「京城」という地名をすべて「Seoul」に変えて記していた。同時に、出版年度を表示する時も「大正」や「昭和」という年号は一切使わず、西暦だけで表わした。こうした事例を考慮すれば、金永鍵は植民地となった祖国を離れて、少しは自由な環境であったハノイの地で、韓国人としてのアイデンティティを間接的にも現わそうと努力したとみることができる。

金永鍵のベトナム研究は、1932年頃からその展開を跡づけることが可能である。同年7月、フランス極東学院の発展過程と近況を紹介した金永鍵は、1934年10月『青年朝鮮』に発表した「東洋學史論」のなかで、東洋学に占める中国学、印度支那学、そして印度学の重要性に言及して、印度支那の文化を理解するためには、印度文化と中国文化の二つの要素を綿密に検討しなければならないと主張した〔金J 1932: 125-135; 金K 1934: 17-19〕。こうした観点は、多分にフランス極東学院所属の研究者たちの学問的傾向を反映していたが、以後金永鍵のベトナム研究は韓国での言論によるベトナム広報という形で具体化していった。

まず、1936年7月1日と12日には、「安南遊記」という題目で、7編のシリーズ記事を『東亜日報』に連載した。1日と2日に発表された「安南遊記：安南의 文壇」〔安南遊記：安南の文壇〕では、ベトナム文壇の状況を論ずる前に、まずベトナム語の発展過程について説明している。金永鍵によると、中国語と同じく「安南言葉」もモノシラビック (Monosyllabic) な言葉であり、吏読に似ている喃 (Nôm) に関しても、

すなわち「三つ」と言う字は「バー」(ba) と言うが、喃で書く時は「𠵼」と記し、三つという「三」と音で「バー」という「巴」を合わせて「𠵼」と書いて、読むときは「バー」、意味は「三つ」と言うのである。

と説明して詳しく扱い、また喃を利用した代表的な作品として『金雲翹』をあげた。また、ベトナム語アルファベット表記法 (quốc ngữ, クオック・ゲー) の発展と統一に決定的な役割を果たした范瓊 (Phạm Quỳnh, ファム・クイン) の *Nam Phong* [南風] 雑誌、著名なフランス語翻訳家の阮文栄 (Nguyễn Văn Vĩnh, ゲエン・ヴァン・ヴィン)、漢学者として文壇で活発に活動していた黎愼 (Lê Du, レ・ズ) などを紹介した。また、より若い文人たちで構成された「自力文壇」の活動とともに、ベトナムの演劇芸術文化についても言及した。

引き続き1936年7月3日付、5日付、7日付、9日付の『東亜日報』では「安南遊記：安

8) 『震壇学報』の第10巻と第15巻の英文表紙には、それぞれ「Kim Yeung-Keun」と「Kim Young-Kun」を使用した。

南の古都」[安南遊記：安南の古都] と言う題目で、18世紀末頃まで首都であると同時に文化の中心地だったハノイの歴史を、周辺地域の歴史とともに紹介している。そして10日付、および11・12日付で、それぞれ「安南遊記：占城の文化」[安南遊記：占城（チャンパ）の文化]と「安南遊記：安南의 서울 順化」[安南遊記：安南の都，順化（フエ）]という主題で、中部ダナンを中心に南部に向かって発展していったチャンパ（Champa）王国の歴史と、19世紀初頭からグエン王朝（阮朝）の首都となったフエ（Huế）の発展過程を紹介した。

金永鍵のベトナム紹介は、『朝鮮日報』を通じても同様になされた。1937年2月14日から19日まで、合わせて5回にわたって「安南通信」を掲載し、中国の炎帝・神農氏から始まるベトナムの建国神話について読者の興味をひくように面白く記述した。

一方、ハノイ滞在によってベトナムについての相当な知識を蓄積した金永鍵の関心は、ベトナム―日本関係史分野の本格的な研究成果を次々に生み出した。⁹⁾ その顕著な例として、まず、1936年11月に発表された「日本見聞録について」（『民族學研究』第2巻第1号）が挙げられる。元々陰暦1815年4月、サイゴン（Sài Gòn）からフエへ行く途中、風浪のために遭難し、日本の九州の「何處」まで漂流した、ダン・ヒュー・ボイ（Đặng Hữu Bôi, 鄧有杯）、グエン・ズイ・バオ（Nguyễn Duy Báo, 阮惟寶）などが、現地で見つめた各種の風俗、制度、文物などを記録した文章を、1828年に、朝廷の官吏のチュオン・ダン・クエ（Trương Đăng Quý, 張登桂）が『日本見聞録』という題目で、再度整理して写本として残しておいたのだが、金永鍵は、当時フランス極東学院に保存されていた8枚の小写本を発掘して、句読点を付して日本語に翻訳して翻刻したのである[松本1936:66-67]。

他方、日本人のベトナム渡航に関連して、1937年8月、『歴史學研究』に「雲屯と日本人」という論文を発表した。ここで金永鍵は、デュムティエ（Gustave Dumoutier）が1895年に *Bulletin de géographie historique et descriptive*（Paris, vol.10）に掲載した“Les comptoirs hollandais de Phô-hien ou Phô-khach, près de Hung-yen (Tonkin) au XVII^e siècle”を根拠にして、日本の商人たちが来訪したと推定されるヴァン・ドン（Vân Đồn, 雲屯）という地域に関する正確な考証を試みている。また、この約1年後の1938年7月に刊行された「安南の史料に現はれたる顯貴の名に就て」（『史學研究』第10巻第1号）は、1931年5月から数年をかけて準備した論考であるが、ここで金永鍵は、『大南寔録前編』に見える「顯貴」という日本名が、日本の資料に現われる「白濱顯貴」ではないかというレ・ズの質問を受けて、『通航一覽』や『外蕃通書』などの日本側の史料を根拠に、16世紀の同一人物である可能性が高いという仮説を提示した。また、16世紀後半から日本国内のキリスト教に対する弾圧を避けた日本人が、ベトナムに移住

9) この分野に対する研究成果は、松本信廣、杉本直治郎、山本達郎、古野清人などの後援に支えられて、『民族學研究』（日本民族学会）、『歴史學研究』（歴史学研究会）、『史學研究』（広島文理科大学内 広島史学研究会）、『史學』（慶應義塾大学文学部内 三田史学会）などに発表された[金J1943a:2]。

し「日本町」を建設した事例も興味深い研究領域となった [金J 1939a]。

金永鍵のベトナム-日本貿易関係に対する関心は、16世紀にとどまらず17世紀までひろがっていった。まず、タイ・ソン (Tây Sơn, 西山) 政権が出現した後、泰徳通宝を鑄造するために、ある日本人が17世紀にベトナムに建てた松本寺の釣鐘を利用したことを明らかにした [金J 1938]。そして同時代のハノイとフンイェン (Hung Yên) で活動していた、日本の商人たちの活動状況についても具体的に論証している [金J 1939b]。

金永鍵のベトナム-日本関係史研究はチャンパ王国に関する研究にまで広がっていった。1938年5月17日の夜、ハノイで脱稿し、翌年『震檀学報』に発表された「安南普陀山名考」によると、1933年金永鍵は、セデスと一緒にダナンのフォー・ダー (Phổ Đà) 山 (普陀山) へ史蹟踏査に行った。ここで見つけた各種の碑銘と漢文資料を利用して、普陀山の名は、観世音菩薩がよく往来して逍遥していたインドのポタラカ (Potalaka あるいは Potaraka と表記) 山の音借に由来し、1925年サレー (A. Sallet) 博士が「普陀山」を“La Montagne de l'universel escarpement”と直訳したのは誤りだと指摘した [Sallet 1925: 9, 130]。そしてこうしたベトナム中部地域に対する関心は、史料が不足した状況でも、16世紀末から17世紀初期におけるチャンパ王国と日本との交流に関心を抱くにいたるきっかけとなった [金J 1940]。

1940年の後半に一旦ベトナムから帰国し、翌年から日本に活動の場を移していた時期には、ベトナムの童話と伝説にも関心をいただき、これを紹介する一方で [金K 1941a: 4; 金J 1941b]、ベトナムの伝統的な多妻制度と仏教に関する研究にも着手している [金J 1943b; 1943c]。同時に、1942年から1943年にかけては、その間の研究成果を3冊の単行本の出版という形で結実させている。金永鍵は、ハノイに滞在していた1931年と1933年に、杉本直治郎と松本信廣とそれぞれ知り合った縁で、自らが収集した多様なベトナム南部関連の地図に基づき、1942年には杉本直治郎と共著で『印度支那に於ける邦人發展の研究』を出版し、また翌1943年には有名な『印度支那と日本との關係』を公刊して学界に問うた [杉本・金 1942: 1-2; 金J 1943a: 1]。

『印度支那に於ける邦人發展の研究』によれば、日本と東南アジアとの間の貿易が次第に活発になるにつれ、東南アジアの主要な港に定着する日本人の数が増えていった。そして17世紀初期には、当時カンボジアの首都であったウドン (Oudong) の外港ポニェ・ルー (Ponhea-lu) のみならず、プノンペンにもいわゆる「日本町」が形成されていたことを「巻末付図」で明らかにした。そして翌年刊行された『印度支那と日本との關係』は、それまでの個別研究成果を集大成すると同時に、ベトナムと日本との関係や、タイの歴史、あるいはベトナム史自体に関する多様な観点も補い、特にベトナム-韓国交流史に関する新たな内容が加えられていた。ベトナムのリー王朝の王子リー・ロン・トゥオン (Lý Long Tường, 李龍祥) に関する伝説は、すでに1927年2月22日付『朝鮮日報』に掲載された記事の中で扱われていたが [『朝鮮日報』1927年2月22日]、金永鍵は、その後さらに1936年夏、甕津を訪問して収集した口頭伝承と、

『花山君家宝』『花山李氏世譜』『花山君本伝』『甕津府邑誌』などの各種資料を活用して「李龍祥の事蹟」の歴史化に貢献した。

もう一つ注目に値する金永鍵の業績は、『日・仏・安南語会話辞典』[1942]の編纂である。この辞書は総説、文字、発音、文法とその特徴、慣用語句、日常語例文、会話などから構成されているが、なによりも読本を含んでいるために、ベトナム語教材として価値を一層高めることとなった。特にこの読本には、インドシナ総督府の学務局（金永鍵による東法学政局（*Nhà học-chính Đông-Pháp*）の訳語）が編纂した児童用の『国文教科書』から抜粋した「*Tôi đi học*」[学校に行く]、「*Cánh đồng nhà quê*」[田園]、「*Sài Gòn và Chợ Lớn*」[サイゴンとチョロン]、および『国文史記教科書』から抜粋した「*Ông Nguyễn Kim*」[阮滄翁]、そして*Nam Phong* [南風]に掲載されていたファム・クインの論説、ニャット・リン（*Nhật Linh*, 一霊）の小説 *Đoạn Tuyệt* [断絶]、グエン・ズー（*Nguyễn Du*, 阮攸）の *Kim Vân Kiều* [金雲翹]などが含まれており、ベトナム語学習を通じてベトナムの日常、歴史、文学を同時に理解させようとした金永鍵の意図を確認することができる。

しかし以後、1946年11月まで、ベトナムに関する金永鍵の研究は断絶した。『語録』の中にベトナムや東南アジアに関する短いノートが断片的にみいだされるだけである。例えば、インドシナ総督が主催した舞踏会で踊りの要請を冷たく断ったナム・フオン（*Nam Phuong*）皇后の力強いエピソードを紹介したり、

私は南洋に行きたい。そして物質的・経済的な社会制度や、またはその組織がまだ発達せず、原始のままの純粋な生活をしている人々の社会に入って、彼らの愛情の心理を研究してみたい。

と述べ [金 K 1948: 29, 33]、東南アジア研究に関する人類学的方法論を模索するにとどまった。

このように解放前後における韓国の政局と自らの選択により、金永鍵のベトナム研究はしばらく進展が見られなかった。その間金永鍵は、1945年11月15日に「朝鮮文学建設本部」の機関紙の『文化戦線』創刊号において、世界文化の任務として、「第一に、帝国主義国家に占領されて戦争の惨禍を受けた諸地域の復旧と発展に協力すること、第二に、まだ残存している反動的な諸国家とその文化に対する闘争に協力すること」などを指摘した [金 K 1945b]。こうした金永鍵の反帝国主義への連帯意識に基づいて、1946年12月末には『朝鮮日報』とのインタビューの中で、「越南」の人民抗争を同病相憐の感情を示しつつ紹介し、韓国の運命と似た「越南」に注目するよう求めている [金 K 1946a]。ところで、当時「越南」が国際信託を願ったにもかかわらず国際問題化されず、結局は1946年2月に「越南共和国」の自治政府として承認された点と、フランス国内総選で勝利をおさめたブー・ルームが主導する共産党内閣が「越南

人」の要求を満足させると同時に円満な解決となるだろうという予想は、「譲歩と協調」による左右両陣営が「民族統一戦線」を提唱する当時においては、韓国の現実政治に深く埋没してしまい、左翼陣営の信託統治を現実的に支持するしかなかった金永鍵の辛さを代弁している[金 K 1946b]。

こうした状況の下、金永鍵がジョルジュ・セデスの論文を翻訳し、1947年5月に発行された『震檀学報』第15号に掲載した「第七-十三世紀の南海帝国」は、どのような意味を持っていたのだろうか。すでに1941年5月に「南洋と列国の経済的活動」という一文の中で、タイ、インドシナ、ポルトガル領ティモール、オランダ領諸島の経済状況を植民地宗主国の政策と関連付けながら比較検討し、東南アジア地域に対する統合的な接近を試みた金永鍵は、自ら次のような執筆の動機を明らかにしている[金 K 1941b; Cœdès 1947: 150]。

いま私はセデス博士の亡くなる前にもう一度彼に会って、彼の該博な薫陶を受けたいという大きな所願をもっているが、私のこの願いがかなわなくても、今後、彼の燦爛なる印度支那と南海史の研究は、私の「東西文化交渉史上における南方の地位」という研究の「出発点」になるはずであるから、ここに、早くも私の手で翻訳し、他所に掲載された一文を再び訂正してハングルで発表するものである。

そして、東西文化交渉史上における南方の地位という金永鍵の研究の出発点は、「南方文化研究」という論文として『震檀学報』第17号に掲載される予定であったが、編集して印刷を待っている最中に、6・25事変（朝鮮戦争）が勃発したため、原稿さえも兵火により焼失してしまったのである[李丙燾 1949: 280; 震檀学会 1994: 21, 91]。ベトナムを出発点にして拡張していった金永鍵の研究は、東南アジア全体に拡張していくことが期待されたが、解放以後、激動の政局のなかで熱情的に活動しようとした金永鍵が現実政治へ身を投じたことと、戦乱による混乱によって、以後、金永鍵が学問的な成果を持続的にあげることが永遠に不可能となったのである。

おわりに

本稿において筆者は、1920年代後半から可能なかぎり金永鍵の生涯を追いつつ、彼のベトナム研究とその意義を検討してみた。当初左翼思想の影響を受けた文学青年であった金永鍵の人生は、1931年のハノイ滞在をきっかけに転機を迎えた。日本国籍のフランス極東学院の韓国人司書は、10年にわたる現地経験によって、ベトナム社会の歴史と文化により親しみ、多方面にわたる「ベトナム学」を先導することができた。しかし1930年代から解放直前まで旺盛な研

究成果を世に出した金永鍵の学問の経歴は、その後1945年の解放前後に「転変無常」という現実の屈折を経験し、いわゆる「南海史」研究のような「東南アジア学」の開拓という任務を、未完の状態に残したのである。

「ベトナム学」から「東南アジア学」への認識の拡大には、「朝鮮学」に対する金永鍵自身の実存的訓練過程が内在していたことも注目に値する。「朝鮮語、朝鮮史をはじめ純朝鮮文学」を朝鮮学の範疇と思っていた文一平〔文2001: 15-16〕の影響を受けたはずの金永鍵は、1946年当時、「朝鮮学」の発展のための必要条件として、朝鮮に関する外国の史料を収集することを提案したことがある〔金K 1947: 3-4〕。

こうした彼の主張が現実においてそのまま実現していくためには多くの難関があったことは事実であるが、1948年に刊行された『黎明期の朝鮮』という著作は、金永鍵個人による「朝鮮学」構築の努力がある程度具現化した作品であったと判断できる。通時的なアプローチを採用した対外交流史である本書の内容は、ベトナム研究のなかで拡がっていった筆者自身の個人的な関心そのまま反映されたと考えることができる。10年間にわたりベトナム現地で外国学の研究を通じて得た多様な経験を「朝鮮学」の確立にも適用してみようとし、「朝鮮学」研究において次第に明らかにされつつも広く知られていなかった「朝鮮」の対外関係を検討することは、金永鍵にとって、今度はより広い視野のもとでの「東南アジア」への回帰を促すことになったのではないだろうか。

こうした金永鍵の「東南アジア」への回帰過程は、「朝鮮」と「東南アジア」との学問的な相互疎通の場を出現させる興味深い現象をよびおこした。たとえば韓国から来た同僚金永鍵と学問的交遊を深めていったレ・ズは、「朝鮮」に対して誰よりも深い理解を示し、金永鍵の懇意の友人になった。こうした両者の交友関係は、金永鍵のベトナム研究と同様にレ・ズのリー・ロン・トゥオン（Lý Long Tường, 李龍祥）研究にも適用され、その成果は1942年に現れた。同じく両国の交流史に関心を持つようになった同僚のチャン・ヴァン・ザップも、朝鮮とベトナム使節が取り交わした多くの詩文を翻訳するようになったのである。また、1959年に平壤を訪問したチャン・ヴァン・ザップは、現地では収集したリー・ロン・トゥオン関連資料を、帰国後ファン・ファイ・レ（Phan Huy Lê）に紹介し、ファン・ファイ・レ教授は、それをきっかけに、12世紀以降高麗に定着したベトナム出身の旌善李氏を研究するに至っている。

本稿で紹介した1930-40年代における金永鍵のベトナム研究は、一個人の学問的成果で終わってしまったものではなかった。彼の先駆的努力は、解放後の政治的な混乱のために継承されることはできなかったが、1960年代半ばから徐々に再び関心をよぶようになり、韓国ベトナム関係史研究の基礎を提供しうる貴重な研究として再評価されるようになった。¹⁰⁾ また、10年

10) 金に関する研究になぜ学術的空白があるのかははっきりしたことはわからないが、幾つかの仮説はたてられる。なによりもこの空白期間は、いわゆる「左翼的」であった金の政治的見解に起因するよう

という長期間にわたって形成された両国の知識人の学問的なネットワークは、ベトナムの同僚の「韓国学」研究を触発する重要な出発点となったことを意味し、相互建設的共存という側面からみると、現在の東南アジア研究者たちに示唆するところが少なくないと思われる。

参考文献

新聞記事

『朝鮮日報』

1927年2月22日. 「[내 고장의 인물과 傳説 (全 21 回)] (16) 萬古偉動의 主人公인 安南 王族 花山君. 甕津 李祥龍의 傳説」

1931年4月13日. 「佛國領事館 事務員 金永鍵씨 安南에 - 大學圖書館 司書로 赴任, 朝鮮人으로는 嚆矢」

1946年12月31日. 「金永鍵氏談 : 보라! 越南人民抗爭 - 崎嶇한 運命 朝鮮과 恰似」

『대중일보』 [大衆日報]

1945年10月22日.

『자유신문』 [自由新聞]

1945年11月9日. 「國定教科書編纂研究委員會, 學務局에 建議書 提出」

1945年12月25日. 「朝鮮文學同盟 結成, 各部 委員 決定」

『서울신문』 [ソウル新聞]

1947年3月19日. 「民戰, 世界勞聯極東調查團入國歡迎準備委員會」

『毎日申報』

1941年7月7日. 「安南의 童話 : 날러다니는 풀」

日本語文献

金永鍵 J. 1932. 「遠東博古學院とその近況」『史學研究』4(1): 125-135.

———. 1938. 「安南松本寺釣り鐘と泰徳通寶」『史學』17(1): 77-87.

———. 1939a. 「迦安に於ける日本人の十字架」『歴史學研究』9(7) (金 [1943a] 178-186 ページ所収).

———. 1939b. 「佛領印度支那東京興安に於ける舖客に就いて」『史學』18(1): 77-109.

———. 1940. 「占城 (チャムパ) と日本」『東亞學』4: 357-370.

———. 1941a. 「安南의 童話 : 날러다니는 풀」『毎日申報』7月7日.

———. 1941b. 「印度支那人類研究所の事業と其の意義」『民族學研究』7(3): 425-433.

———. 1941c. 「安南に於ける浦島の傳説」『民族學研究』7(3): 358-362.

———. 1942. 『日・仏・安南語會話辞典』東京: 岡倉書房.

———. 1943a. 「印度支那と日本との關係」東京: 富山房.

———. 1943b. 「安南の多妻制度」『民族學研究』新1(2): 47-50.

———. 1943c. 「安南の佛教と祭祀」『大法輪』3月.

京城第二公立高等普通學校. n.d. 『生徒原簿』

ㄱ. みえる。1960年に、金の先輩であった李崇寧（韓国国語学者、京城第二高普出身）は、金の韓国学をしらしめようとしたが、金に対する評価は非常に単純なものだった。この再評価の動きは、イ・スンマン（李承晩）政権の崩壊とパク・チョンヒ（朴正熙）のクーデターとの間に起こった。特にパク・チョンヒの出現以降、強力な反共主義のために、韓国人研究者たちは金の多様な学術研究をきちんと評価することができなかった。さらには、韓国において東南アジア研究が認知されず、韓国人研究者の興味をひかなかったことも理由としてあげられる。筆者自身は1990年代に、金が日本語で執筆した本に巡り会った。そしてなぜ1943年に、金という韓国人とおもわれる著者がこの学術的研究を出版することになったのであろうかという疑問を抱いた。この純粋な好奇心こそ、2008-09年に筆者が金の種々の活動を研究するに至った理由である。金に関する筆者の研究は、彼に関するより多くの資料を渉猟した総合的なものであり、金の限られた作品のみ考察し、彼を単に、韓国学の学者、文芸評論家、人類学者、あるいは親日のベトナム学の学者——もしそうであれば、この評価は否定的なものだが、1930-40年代の金の活動をみても、筆者はこの見解には同意できない——などとみなす他の研究者たちの見解とは異なるものである。

- 杉本直治郎; 金永鍵. 1942. 『印度支那に於ける邦人發展の研究——古地圖に印されたる日本河に就いて』 東京: 富山房.
- 朝鮮總督府. 1910-14, 1916-21, 1924. 『朝鮮總督府及所屬官署職員錄』 京城: 朝鮮總督府.
- 內閣印刷局. 1913-1917. 『日本帝國職員錄 朝鮮總督府篇』 東京: 內閣印刷局.
- 日本民族学会. 1943. 「学会彙報」『民族學研究』 7(3): 437-439.
- 松本信廣. 1936. 「追記」『民族學研究』 2(1): 66-69.

韓國語文獻

- 권영민 [權寧珉]. 1990. 『한국근대문인대사전』 [韓國近代文人大事典] 서울: 亞細亞文化社.
- 친일인명사전편찬위원회 [親日人名辭典編纂委員會]; 민족문제연구소 [民族問題研究所]. 2008. 『친일인명사전 수록대상자 명단』 [親日人名辭典收錄對象者名單].
- 조흥국 [趙興國]. 2001. 「동남아시아 연구의 문제와 과제」 [東南アジア研究の問題と課題] 『국제지역연구』 [國際地域研究] 5(1): 47-67.
- 쥘르즈 쎬데스 [Cœdès, George]; 金永鍵 (訳). 1947. 「第七-十三世紀의南海帝國」 『震檀學報』 15: 134-150.
- 경북동창회 [景福同窓會]. 2007. 『2007 경북동창명부』 [2007 景福同窓名簿] 서울: 경북고등학교 경북기념관.
- 임동권 [任東權]. 2004. 「김효경·김영건론」 『한국민속학인물사』 [韓國民俗學人物史], (金孝敬·金永鍵 (論)), 272-286 페이지所収. 서울: 보고사.
- 전경수 [全京秀]. 1999. 『한국인류학백년』 [韓國人類學百年] 서울: 일지사.
- 진단학회 [震檀學會]. 1939. 「本號執筆者紹介」 『震檀學報』 4: 199.
- . (編). 1994. 『震檀學會六十年誌』 서울: 震檀學會學會.
- 김영건 [金永鍵] K. 1934. 「東洋學史論」 『青年朝鮮』 1(1): 17-24.
- . 1937. 「안남 하노이 통신」 [安南ハノイ通信] 『한글』 [한글] 44(5-4): 464-465.
- . 1941a. 「安南의 童話: 날러다니는 풀」 『每日申報』 7월 7日.
- . 1941b. 「南洋과 列國의 經濟的 活動」 『朝光』 7(5): 42-49.
- . 1941c. 「西伯利亞와 朝鮮의 移民」 『春秋』 2(8): 58-63.
- . 1941d. 「海外에 紹介된 『春香傳』」 『春秋』 3(8): 130-131.
- . 1942. 「海外에 紹介된 『直星行年便覽』」 『朝光』 8(10): 116-117.
- . 1944. 「朝鮮外交史의 一端」 『朝光』 10(1): 77-79.
- . 1945a. 「再出發에 있어 文學的 自己批判: 앞으로 나갈 길을操心하라」 『신문예』 [新文芸] 1(2): 36-37.
- . 1945b. 「世界文化的 動向」 『文化戰線』 創刊号. (1988. 『建設期の 朝鮮文學』 [建設期の朝鮮文學] 崔元植 (解題), 106-107 페이지所収. 서울: 온누리.)
- . 1946a. 「金永鍵氏 談: 보라! 越南人民抗爭—崎嶇한 運命 朝鮮과 恰似」 『朝鮮日報』 12月 31日.
- . 1946b. 「民主主義의 史的 考察」 『大潮』 1(2): 4-14.
- . 1947. 『朝鮮開化秘譚』 서울: 正音社.
- . 1948. 『語錄: 一九四二—一九四四年의 遺書』 서울: 白楊堂.
- 김윤식 [金允植]. 1985. 「해방공간의 문학」 [解放空間의 文學] 『해방전후사의 인식』 [解放前後史의 認識] 2, 강민길 [姜萬吉] 等著, 449-492 페이지所収. 서울: 한길사.
- 김혜니 [Kim·HeNi]. 2002. 『한국 현대시문학사 연구』 [韓國現代詩文學史研究] 서울: 국학자료원.
- 문일평 [文一平]. 2001. 「史眼으로 본 朝鮮 (1946)」 『湖岩 文一平全集②』, 1-16 페이지所収. 서울: 民俗苑.
- 서울타임스사출판국 [ソウルタイムス社出版局]. 1946. 「文學家住所錄」 『新文學』 1(2): 165-166.
- 이병도 [李丙燾]. 1949. 「編輯後記」 『震檀學報』 16: 280.
- 이인영 [李仁榮]. 1947. 「彙報」 『震檀學報』 15: 151-154.
- . 1949. 「彙報」 『震檀學報』 16: 177-180.
- 이태준 [李泰俊]. 2005. 『이태준 전집』 [李泰俊全集] 1 서울: 가람기획.
- 유인선 [劉仁善]. 2007. 「베트남 李王朝의 後孫 李龍祥의 行跡」 [베트남 李王朝의 子孫, 李龍祥의 行跡] 『한국 베트남 관계사 국제 심포지엄 자료집』 [韓國·베트남 關係史 國際シンポジウム 資料集], 68-80 페이지所収. 서울: 한국 역사학회; 하노이: 베트남 역사과학회.

フランス語文献

BEFEO (*Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*) tomes 31-39. 1931-1939.

Goto, S.; and Prunier, M. 1930. *Épisodes du Heiké Monogatari*, traduits par. Avant-propos de M. Sylvain Lévi. Paris: Ernest Lereoux.

Kim, Yung Kun. 1938. Note sur la nouvelle romanisation officielle du japonais. *BEFEO* 38: 306-308.

Przyluski, M.J. *et al.* 1931. *Bibliographie bouddhique*. Paris: Geuthner.

Sallet, A. 1925. Les Montagnes de Marbe (Ngu-hanh son). *Bulletin des Amis du Vieux Hue* IIe année (1924) n° 1 (janvier-mars): 8-131.

英語文献

Clémentin-Ojha, Catherine; and Manguin, Pierre-Yves. 2007. *A Century in Asia: The History of the École Française d'Extrême-Orient, 1898-2006*. Singapore: Editions Didier Millet.

Gutman, Pamela. 1976. Ancient Arakan. Ph.D. Dissertation. Canberra: The Australian National University.

ベトナム語文献

Nguyễn Thiệu Lâu. 1997. Ông Chủ Sự: Đông Phương Bắc Cổ Học Viện. *Xưa và Nay* 40: 29-30.

中国語文献

金永鍵 C. 1939a. 「安南普陀山名考」『震檀学報』10: 154-158.